
銀河鉄道の夜

宮沢 賢治

目次

一、午^ゴ后^ゴの授業

9

二、活版所

14

三、家

33

四、ケンタウル祭の夜

41

五、天^{テン}気^キ輪^{リン}の柱

47

六、銀河ステーション

62

七、北十字とプリオシン海岸

68

八、鳥を捕^とる人

77

九、ジヨバンニの切符^{きっぷ}

84

銀
河
鉄
道
の
夜

一、午後の授業

「ではみなさんは、そういうふうには川だと云われたり、乳の流れたあとだと云われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。」先生は、黒板に吊した大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶった銀河帯のようなどころを指しながら、みんなに間をかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四五人手をあげました。ジョバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、このごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないという気持ちでするのでした。ところが先生は早くもそれを見附けたのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか。」

ジョバンニは勢いきおいよく立ちあがりましたが、立って見るともうはつきりとそれを答えることができないのでした。ザネリが前の席からふりかえって、ジョバンニを見てくすつとわらいました。ジョバンニはもうどぎまぎしてまっ赤になってしまいました。先生がまた云いました。

「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河は大体何でしょう。」

やっぱり星だとジョバンニは思いましたがこんどもすぐに答えることができませんでした。

先生はしばらく困ったようすでしたが、眼めをカムパネルラの方へ向けて、

「ではカムパネルラさん。」と名指しました。するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはり同じもじ立ち上ったままやはり答えができませんでした。

先生は意外なようにしばらくじっとカムパネルラを見ていましたが、急いで「ではよし。」と云いながら、自分で星図ほしずを指さしました。

「このぼんやりと白い銀河を大きな望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう。」

ジョバンニはまっ赤になってうなずきました。けれどもいつかジョバンニの眼のなかに

は涙なみだがいっぱいになりました。そうだ僕は知っていたのだ、勿論カムパネルラも知っている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといっしょに読んだ雑誌のなかにあったのだ。それどこでなくカムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書齋しょさいから巨おおきな本をもってきて、ぎんがというところをひろげ、まっ黒な頁ページいっぱい白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れる筈はずもなかったのに、すぐに返事をしなかったのは、このごろぼくが、朝にも午後にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなともはきはき遊ばず、カムパネルラともあまり物を云わないようになったので、カムパネルラがそれを知って気の毒がってわざと返事をしなかったのだ、そう考えるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのです。

先生はまた云いました。

「ですからもしこの天あまの川がわがほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のその砂や砂利じやりの粒つぶにもあたるわけです。またこれを巨おおきな乳の流れと考えるならもつと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんでいる脂肪しゆの球にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと云いますと、

それは真空という光をある速さで伝えるもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮^うか
いるのです。つまりは私どもも天の川の水のなかに棲^すんでいるわけです。そしてその天の
川の水のなから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の
深く遠いところほど星がたくさん集って見えしたがって白くぼんやり見えるのです。この
模型をごらん下さい。」

先生は中にたくさん光る砂のつぶの入った大きな両面の凸^{とつ}レンズを指しました。

「天の川の形はちようどこんななのです。このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽
と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。私どもの太陽がこのほぼ中ごろにあつ
て地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立ってこのレンズの
中を見まわすとしてごらん下さい。こつちの方はレンズが薄^{うす}いのでわずかの光る粒一^{すなわ}即ち
星しか見えないのでしょうか。こつちやこつちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がた
くさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるというこれがつまり今日の銀河の説なのです。
そんならこのレンズの大きさがどれ位あるかまたその中のさまざまの星についてはもう時
間ですからこの次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭なのですからみ
なさんは外へでてよくそらをごらん下さい。ではここまでです。本やノートをおしまいな

さい。」

そして教室中はしばらく机つくえの蓋かたをあけたりしめたり本を重ねたりする音がいっぱいでしたがまもなくみんなはきちんと立って礼をすると教室を出ました。

二、活版所

ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七八人は家へ帰らずカムパネルラをまん中にして校庭の隅の桜の木のところが集まっていました。それはこんやの星祭に青いあかりをこしらえて川へ流す烏瓜を取りに行く相談らしかったのです。

けれどもジョバンニは手を大きく振ってどしどし学校の門を出て来ました。すると町の家々ではこんやの銀河の祭りにいちいの葉の玉をつるしたりひのきの枝にあかりをつけたりいろいろ仕度をしているのでした。

家へは帰らずジョバンニが町を三つ曲つてある大きな活版処にはいつてすぐ入口の計算台に居ただぶだぶの白いシャツを着た人におじぎをしてジョバンニは靴をぬいで上りますと、突き当りの大きな扉をあけました。中にはまだ昼なのに電燈がついてたくさん回転器がばたりばたりとまわり、きれで頭をしばったりラムプシェードをかけたたりした人たち

が、何か歌うように読んだり数えたりしながらたくさん働いて居りました。

ジョバンニはすぐ入口から三番目の高い卓子デスクに座すわった人の所へ行っておじぎをしました。その人はしばらく棚たなをさがしてから、

「これだけ拾って行けるかね。」と云いながら、一枚の紙切れを渡わたしました。ジョバンニはその人の卓子の足もとから一つの小さな平たい函はこをとりだして向うの電燈のたくさんついた、たてかけてある壁かべの隅の所へしゃがみ込こむと小さなピンセットでまるで粟粒あわぶつぶぐらいの活字を次から次と拾いはじめました。青い胸あてをした人がジョバンニのうしろを通りながら、

「よう、虫めがね君、お早う。」と云いますと、近くの四五人の人たちが声もたてずこつちも向かずに冷くわらいました。

ジョバンニは何べんも眼を拭ぬぐいながら活字をだんだんひろいました。

六時がうってしばらくたったころ、ジョバンニは拾った活字をいっぱいに入れた平たい箱はこをもういちど手にもった紙きれと引き合せてから、さっきの卓子の人へ持って来ました。その人は黙だまってそれを受け取かって微かすかにうなずきました。

ジョバンニはおじぎをすると扉をあけてさっきの計算台のところに来ました。するとさ

つきの白服を着た人がやっぱりだまって小さな銀貨を一つジョバンニに渡しました。ジョバンニは俄かに顔いろがよくなつて威勢よくおじぎをすると台の下に置いた鞆をもつてもてへ飛びだしました。それから元氣よく口笛を吹きながらパン屋へ寄つてパンの塊を一つと角砂糖を一一袋買いますと一目散に走りだしました。

三、家

ジョバンニが勢よく帰つて来たのは、ある裏町の小さな家でした。その三つならんだ入口の一番左側には空箱に紫いろのケールやアスパラガスが植えてあつて小さな二つの窓には日覆いが下りたままになっていました。

「お母さん。いま帰つたよ。工合悪くなかったの。」ジョバンニは靴をぬぎながら云いました。

「ああ、ジョバンニ、お仕事がひどかつたろう。今日は涼しくてね。わたしはずうっと工合がいいよ。」

ジョバンニは玄関を上つて行きますとジョバンニのお母さんがすぐ入口の室に白い巾を被つて寝んでいたのでした。ジョバンニは窓をあけました。

「お母さん。今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思つて。」

「ああ、お前さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから。」

「お母さん。姉さんはいつ帰ったの。」

「ああ三時ころ帰ったよ。みんなそこらをしてきてね。」

「お母さんの牛乳は来ていないんだらうか。」

「来なかつたらうかねえ。」

「ぼく行つてとつて来よう。」

「あああたしはゆつくりでいいんだからお前さきにおあがり、姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行つたよ。」

「ではぼくたべよう。」

ジョバンニは窓のところからトマトの皿さらをとつてパンといっしよにしばらくむしやむしやたべました。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつと間もなく帰つてくると思うよ。」

「あああたしもそう思う。けれどもおまえはどうしてそう思うの。」

「だって今朝の新聞に今年は北の方の漁は大へんよかつたと書いてあつたよ。」

「ああだけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしれない。」

「きつと出ているよ。お父さんが監獄へ入るようなそんな悪いことをした筈がないんだ。この前お父さんが持つてきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのとなかいの角だの今だつてみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかわるがわる教室へ持つて行くよ。一昨年修学旅行で〔以下教文字分空白〕

「お父さんはこの次はおまえにラッコの上着をもつてくるといったねえ。」

「みんながぼくにあうとそれを云うよ。ひやかすように云うんだ。」

「おまえに悪口を云うの。」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決して云わない。カムパネルラはみんながそんなことを云うときは気の毒そうにしているよ。」

「あの人はうちのお父さんとはちようどおまえたちのように小さいときからのお友達だったそうだよ。」

「ああだからお父さんはぼくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行ったよ。あのころはよかつたなあ。ぼくは学校から帰る途中たびたびカムパネルラのうちに寄つた。カムパネルラのうちにはアルコールランプで走る汽車があつたんだ。レールを七つ組み合せると円くなってそれに電柱や信号標もついていて信号標のあかりは汽車が通るときだけ青くな

るようになっていたんだ。いつかアルコールがなくなるとき石油をつかったら、かま罐がすつかり煤すすけたよ。」

「そうかねえ。」

「いまも毎朝新聞をまわしに行くよ。けれどもいつでも家中まだしいんとしているからな。」

「早いからねえ。」

「ザウエルという犬がいるよ。しつぽがまるで箒ほうきのようだ。ぼくが行くと鼻を鳴らしてついてくるよ。ずうつと町の角までついてくる。もつとついてくることもあるよ。今夜はみんなで烏瓜かちゅうりのあかりを川へながしに行くんだって。きっと犬もついて行くよ。」

「そうだ。今晩は銀河のお祭だねえ。」

「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ。」

「ああ行っておいで。川へははいらないでね。」

「ああぼく岸から見ただけなんだ。一時間で行つてくるよ。」

「もつと遊んでおいで。カムパネルラさんと一緒いっしょなら心配はないから。」

「ああきつと一緒にだよ。お母さん、窓をしめて置こうか。」

「ああ、どうか。もう涼しいからね」

ジヨバンニは立って窓をしめお皿やパンの袋を片附かたづけると勢よく靴をはいて
「では一時間半で帰ってくるよ。」と云いながら暗い戸口を出ました。

四、ケンタウル祭の夜

ジョバンニは、口笛を吹いているようなさびしい口付きで、檜ひのきのまつ黒にならんだ町の坂を下りて来たのでした。

坂の下に大きな一つの街燈が、青白く立派に光って立っていました。ジョバンニが、ほとんど電燈の方へ下りて行きますと、いままでばけもののように、長くぼんやり、うしろへ引いていたジョバンニの影かげぼうしは、だんだん濃こく黒くはつきりなつて、足をあげたり手を振ふつたり、ジョバンニの横の方へまわつて来るのでした。

（ぼくは立派な機関車だ。ここは勾配こうばいだから速いぞ。ぼくはいまその電燈を通り越こす。そうら、こんどはぼくの影法師はコムパスだ。あんなにくるつとまわつて、前の方へ来た。）とジョバンニが思いながら、大股おおまたにその街燈の下を通り過ぎたとき、いきなりひるまのザネリが、新らしいえりの尖とがつたシャツを着て電燈の向う側の暗い小路こうじから出て来て、ひら

つとジョバンニとすれちがいました。

「ザネリ、烏瓜ながしに行くの。」ジョバンニがまだそう云ってしまわないうちに、

「ジョバンニ、お父さんから、らっこの上着が来るよ。」その子が投げつけるようにうしろから叫びました。

ジョバンニは、ぼつと胸がつめたくなり、そこら中きいんと鳴るように思いました。

「何だい。ザネリ。」とジョバンニは高く叫び返しましたがもうザネリは向うのひばの植った家の中へはいつていました。

「ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを云うのだろう。走るときはまるで鼠ねずみのようなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを云うのはザネリがばかなからだ。」

ジョバンニは、せわしくいろいろのことを考えながら、さまざまの灯あかりや木の枝えだで、すっかりきれいに飾かざられた街を通って行きました。時計屋の店には明るくネオン燈がついて、一秒ごとに石でこさえたふくろうの赤い眼めが、くるつくるとうごいたり、いろいろな宝石が海のような色をした厚い硝子ガラスの盤ばんに載のつて星のようにゆっくり循環めぐったり、また向う側から、銅の人馬がゆっくりこつちへまわって来たりするのです。そのまん中に円い黒い

星座早見が青いアスパラガスの葉で飾ってありました。

ジョバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。

それはひる学校で見たあの図よりはずうっと小さかったのですがその日と時間に合せて盤をまわすと、そのとき出ているそらがそのまま楕円形だえんけいのなかにめぐってあらわれるようになって居りおやはりそのまん中には上から下へかけて銀河がぼうとけむったような帯になってその下の方ではかすかに爆發ばくはつして湯気でもあげているように見えるのでした。またそのうしろには三本の脚あしのついた小さな望遠鏡が黄いろに光って立っていましたしいちばんうしろの壁かべには空じゅうの星座をふしぎな獣けものや蛇へびや魚や瓶びんの形に書いた大きな図がかかっていました。ほんとうにこんなような蝸かただの勇士だのそらにぎつしり居るだろうか、ああぼくはその中をどこまでも歩いて見たいと思つてたりしてしばらくぼんやり立って居ました。

それから俄にわかにお母さんの牛乳のことを思いだしてジョバンニはその店をはなれました。そしてきゆうくつな上着の肩かたを気にしながらそれでもわざと胸を張って大きく手を振って町を通って行きました。

空気は澄すみきって、まるで水のように通りや店の中を流れましたし、街燈はみなまつ青

なもみや櫛なちの枝で包まれ、電気会社の前の六本のプラタヌスの木などは、中に沢山たくさんの豆電燈がついて、ほんとうにそこらは人魚の都のように見えるのでした。子どもらは、みんな新らしい折のついた着物を着て、星めぐりの口笛くちぶえを吹ふいたり、

「ケンタウルス、露つゆをふらせ。」と叫んで走ったり、青いマグネシヤの花火を燃したりして、たのしそうに遊んでいるのでした。けれどもジョバンニは、いつかまた深く首を垂れて、そこらのにぎやかさとはまるでちがったことを考えながら、牛乳屋の方へ急ぐのでした。

ジョバンニは、いつか町はずれのポプラの木が幾本いくほんも幾本も、高く星ぞらに浮うかんでいるところに来ていました。その牛乳屋の黒い門を入り、牛の匂においのするうすくらい台所の前に立って、ジョバンニは帽子ぼうしをぬいで「今晚は、」と云いましたら、家の中はしいんとして誰たれも居たようではありませんでした。

「今晚は、ごめんなさい。」ジョバンニはまっすぐに立ってまた叫びました。するとしばらくたってから、年老とった女の人が、どこか工合ぐあいが悪いようにそろそろと出て来て何か用かと口の中で云いました。

「あの、今日、牛乳が僕ぼくんとこへ来なかつたので、貰もらいにあがつたんです。」ジョバンニが一生けん命いそおと勢よく云いました。

「いま誰もいないでわかりません。あしたにして下さい。」

その人は、赤い眼の下のとこを擦りながら、ジョバンニを見おろして云いました。「おつかさんが病氣なんですから今晚でないと困るんです。」

「ではもう少したつてから来て下さい。」その人はもう行つてしまいそうでした。

「そうですか。ではありがとうございます。」ジョバンニは、お辞儀をして台所から出ました。

十字になつた町のかどを、まがろうとしましたら、向うの橋へ行く方の雑貨店の前で、黒い影やぼんやり白いシャツが入り乱れて、六七人の生徒らが、口笛を吹いたり笑つたりして、めいめい烏瓜の燈火あかりを持つてやつて来るのを見ました。その笑い声も口笛も、みんな聞きおぼえのあるものでした。ジョバンニの同級の子供らだったのです。ジョバンニは思わずどきつとして戻ろうとしましたが、思い直して、一そう勢よくそつちへ歩いて行きました。

「川へ行くの。」ジョバンニが云おうとして、少しのどがつまったように思ったとき、

「ジョバンニ、らつこの上着が来るよ。」さっきのザネリがまた叫びました。

「ジョバンニ、らつこの上着が来るよ。」すぐみんなが、続いて叫びました。ジョバンニはまっ赤になつて、もう歩いているかもわからず、急いで行きすぎようと思いましたら、その

なかにカムパネルラが居たのです。カムパネルラは気の毒そうに、だまって少しわらって、怒らないだろうかというようにジョバンニの方を見ていました。

ジョバンニは、遁げるようにその眼を避け、そしてカムパネルラのせいの高いかたちが過ぎて行つて間もなく、みんなはてんでに口笛を吹きました。町かどを曲るとき、ふりかえつて見ましたら、ザネリがやはりふりかえつて見ていました。そしてカムパネルラもまた、高く口笛を吹いて向うにぼんやり見える橋の方へ歩いて行つてしまつたのです。ジョバンニは、なんとも云えずさびしくなつて、いきなり走り出しました。すると耳に手をあてて、わああと云いながら片足でびよんびよん跳んでいた小さな子供らは、ジョバンニが面白くてかけるのだと思つてわあいと叫びました。まもなくジョバンニは黒い丘の方へ急ぎました。

五、天氣輪てんきりんの柱

牧場のうしろはゆるい丘になって、その黒い平らな頂上は、北の大熊星おおくまぼしの下に、ぼんやりふだんよりも低く連つて見えました。

ジヨバンニは、もう露の降りかかった小さな林のこみちを、どんどんのぼつて行きました。まつくらな草や、いろいろな形に見えるやぶのしげみの間を、その小さなみちが、一すじ白く星あかりに照らしだされてあつたのです。草の中には、ぴかぴか青びかりを出す小さな虫もいて、ある葉は青くすかし出され、ジヨバンニは、さつきみんなの持つて行つた烏瓜からすうりのあかりのようだとも思いました。

そのまつ黒な、松や檜ひのきの林を越こえると、俄にわかにがらんと空がひらけて、天あまの川がわがしらしらと南から北へ亘わたっているのが見え、また頂いただきの、天氣輪てんきりんの柱も見わけられたのでした。つりがねそうか野ぎくかの花が、そこらいちめん、夢ゆめの中からも薰かおりだしたというよう

に咲き、鳥が一疋、丘の上を鳴き続けながら通つて行きました。

ジョバンニは、頂の天氣輪の柱の下に来て、どこどかするからだを、つめたい草に投げました。

町の灯は、暗の中をまるで海の底のお宮のけしきのようにともし、子供らの歌う声や口笛、きれぎれの叫び声もかすかに聞えて来るのでした。風が遠くで鳴り、丘の草もしずかにそよぎ、ジョバンニの汗でぬれたシャツもつめたく冷されました。ジョバンニは町はずれから遠く黒くひろがった野原を見わたしました。

そこから汽車の音が聞えてきました。その小さな列車の窓は一列小さく赤く見え、その中にはたくさんの旅人が、苹果を剥いたり、わらったり、いろいろな風に行っていると考えますと、ジョバンニは、もう何とも云えずかなしくなつて、また眼をそらに挙げました。

あああの白いそのの帯がみんな星だというぞ。

ところがいくら見ている、そのそらはひる先生の云つたような、がらんとした冷いところとは思われませんでした。それどころでなく、見れば見るほど、そこは小さな林や牧場やある野原のように考えられて仕方なかったのです。そしてジョバンニは青い琴の星が、三つにも四つにもなつて、ちらちら瞬き、脚が何べんも出たり引つ込んだりして、と

うとう蕈きのこのように長く延びるのを見ました。またすぐ眼の下のまちまでがやっぱりぼんやりしたたくさんの星の集りか一つの大きなけむりかのように見えるように思いました。

六、銀河ステーション

そしてジヨバンニはすぐうしろの天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形になって、しばらく蛍ほたるのように、ペかペか消えたりともったりしているのを見ました。それはだんだんはつきりして、とうとうりんとうごかないようになり、濃い鋼青こうせいのそらの野原にたちました。いま新らしく灼やいたばかりの青い鋼はがねの板のような、そらの野原に、まっすぐにすきつと立ったのです。

するとどこかで、ふしぎな声が、銀河ステーション、銀河ステーションと云いう声がしたと思うといきなり眼の前が、ぱつと明るくなって、まるで億万の蛍鳥賊ほたるいの火を一ぺんに化石させて、そら中に沈しずめたという工合ぐあい、またダイヤモンド会社で、ねだんがやすくならないために、わざと獲とれないふりをして、かくして置いた金剛石こんごうせきを、誰たれかがいきなりひっくりかえして、ばら撒まいたという風に、眼の前がさあつと明るくなって、ジヨバンニは、思

わず何べんも眼を擦こすってしまいました。

気がついてみると、さつきから、ごとごとごとごと、ジョバンニの乗っている小さな列車が走りつづけていたのです。ほんとうにジョバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄いろの電燈のならんだ車室に、窓から外を見ながら座すわっていたのです。車室の中は、青い**天蚕絨**を張った腰掛こしかが、まるでがら明きで、向うの鼠ねずみいろのワニスを塗った壁かべには、真鍮しんちゆうの大きなぼたんが二つ光っているのです。

すぐ前の席に、ぬれたようにまっ黒な上着を着た、せいの高い子供が、窓から頭を出して外を見ているのに気が付きました。そしてそのこどもの肩かたのあたりが、どうも見たことのあるような気がして、そう思うと、もうどうしても誰だかわかりたくて、たまらなくなりました。いきなりこつちも窓から顔を出そうとしたとき、俄かにその子供が頭を引つ込めて、こつちを見ました。

それはカムパネルラだったのです。

ジョバンニが、カムパネルラ、きみは前からここに居たのと云おうと思ったとき、カムパネルラが

「みんなはねずいぶん走ったけれども遅おくれてしまったよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけ

れども追いつかなかった。」と云いました。

ジヨバンニは、(そうだ、ぼくたちはいま、いつしよにさそつて出掛けたのだ。)とおもいながら、

「どこかで待っていていようか」と云いました。するとカムパネルラは

「ザネリはもう帰つたよ。お父さんが迎むかいにきたんだ。」

カムパネルラは、なぜかそう云いながら、少し顔いろが青ざめて、どこか苦しいというふうでした。するとジヨバンニも、なんだかどこかに、何か忘れたものがあるというような、おかしな気持ちが出てしまっていました。

ところがカムパネルラは、窓から外をのぞきながら、もうすっかり元気が直つて、勢いきおいよく云いました。

「ああしまった。ぼく、水筒すいとうを忘れてきた。スケッチ帳も忘れてきた。けれど構わない。もうじき白鳥の停車場だから。ぼく、白鳥を見るなら、ほんとうにすきだ。川の遠くを飛んでいたつて、ぼくはきつと見える。」そして、カムパネルラは、円い板のようになった地図を、しきりにぐるぐるまわして見ていました。まったくその中に、白くあらわされた天の川の左の岸に沿って一条の鉄道線路が、南へ南へとたどつて行くのでした。そしてその

地図の立派なことは、夜のようにまっ黒な盤の上に、一一の停車場や三角標、泉水や森が、青や橙や緑や、うつくしい光でちりばめられてありました。ジヨバンニはなんだかその地図をどこかで見たようにおもいました。

「この地図はどこで買ったの。黒曜石でできてるねえ。」

ジヨバンニが云いました。

「銀河ステーションで、もらったんだ。君もらわなかったの。」

「ああ、ぼく銀河ステーションを通ったろうか。いまぼくたちの居るとこ、ここだろう。」

ジヨバンニは、白鳥と書いてある停車場のしるしの、すぐ北を指しました。

「そうだ。おや、あの河原は月夜だろうか。」

そつちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろの空のすすきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆられてうごいて、波を立てているのでした。

「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ。」ジヨバンニは云いながら、まるでね上りたいくらい愉快になって、足をこつこつ鳴らし、窓から顔を出して、高く高く星めぐりの口笛を吹きながら一生けん命延びあがって、その天の川の水を、見きわめようとはしましたが、はじめはどうしてもそれが、はっきりしませんでした。けれどもだんだん気をつけて見ると、

そのきれいな水は、ガラスよりも水素よりもすきとおつて、ときどき眼の加減か、ちらちら紫いろのこまかな波をたてたり、虹のようにぎらつと光つたりしながら、声もなくどんだん流れて行き、野原にはあつちにもこつちにも、燐光の三角標が、うつくしく立っていたのです。遠いものは小さく、近いものは大きく、遠いものは橙や黄いろではつきりし、近いものは青白く少しかすんで、或いは三角形、或いは四辺形、あるいは電や鎖の形、さまざまにならんで、野原いっぱい光っているのです。ジョバンニは、まるでときどきして、頭をやけに振りまわした。するとほんとうに、そのきれいな野原中の青や橙や、いろいろかがやく三角標も、てんでに息をつくように、ちらちらゆれたり顫えたりしました。

「ぼくはもう、すっかり天の野原に来た。」ジョバンニは云いました。

「それにこの汽車石炭をたいていないねえ。」ジョバンニが左手をつき出して窓から前の方を見ながら云いました。

「アルコールか電気だろう。」カムパネルラが云いました。

ことごとごとごと、その小さなきれいな汽車は、そのすすきの風にひるがえる中を、天の川の水や、三角点の青じろい微光の中を、どこまでもどこまでもと、走って行くのでした。

「ああ、りんどうの花が咲いている。もうすっかり秋だねえ。」カムパネルラが、窓の外を指さして云いました。

線路のへりになったみじかい芝草しばくさの中に、月長石つきざいでも刻まれたような、すばらしい紫のりんどうの花が咲いていました。

「ぼく、飛び下りて、あいつをとって、また飛び乗ってみせようか。」ジヨバンニは胸むねを躍らせて云いました。

「もうだめだ。あんなにうしろへ行ってしまったから。」

カムパネルラが、そう云ってしまうかしまわないうち、次のりんどうの花が、いっぱい光って過ぎて行きました。

と思ったら、もう次から次から、たくさんわのきいろな底をもったりんどうの花のコップが、湧くように、雨のように、眼の前を通り、三角標の列は、けむるように燃えるように、いよいよ光って立ったのです。

七、北十字とプリオシン海岸

「おつかさんは、ぼくをゆるして下さいさるだろうか。」

いきなり、カムパネルラが、思い切ったというように、少しどもりながら、急ぎこんで云いました。

ジョバンニは、

（ああ、そうだ、ぼくのおつかさんは、あの遠い一つのちりのように見える橙いろの三角標のあたりにいらっしやって、いまぼくのことを考えているんだった。）と思いつながら、ぼんやりしてだまっていました。

「ぼくはおつかさんが、ほんとうに幸さいわいになるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おつかさんのいちばんの幸なんだろう。」カムパネルラは、なんだか、泣きだしたいのを、一生けん命こらえているようでした。

「きみのおっかさんは、なんにもひどいことないじゃないの。」ジョバンニはびっくりして叫びました。

「ぼくわからない。けれども、誰だつて、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おっかさんは、ぼくをゆるして下さると思う。」カムパネルラは、なにかほんとうに決心しているように見えました。

俄かに、車のなかで、ぼつと白く明るくなりました。見ると、もうじつに、金剛石や草の露やあらゆる立派さをあつめたような、きらびやかな銀河の河床の上を水は声もなくかたちもなく流れ、その流れのまん中に、ぼうつと青白く後光の射した一つの島が見えるのでした。その島の平らなだけに、立派な眼もさめるような、白い十字架がたつて、それはもう凍った北極の雪で鑄たといったらいいか、すきつとした金いろの円光をいただいて、しずかに永久に立っているのです。

「ハルレヤ、ハルレヤ。」前からもうしろからも声が起りました。ふりかえって見ると、車室の中の旅人たちは、みなまっすぐにきもののひだを垂れ、黒いバイブルを胸にあてたり、水晶の数珠をかけたたり、どの人もつましく指を組み合せて、そつちに祈っているのです。思わず二人もまっすぐに立ちあがりました。カムパネルラの頬は、まるで熟した苹果の

あかしのようにうつくしくかがやいて見えました。

そして島と十字架とは、だんだんうしろの方へうつって行きました。

向う岸も、青じろくぼうつと光ってけむり、時々、やっぱりすすきが風にひるがえるらしく、さつとその銀いろがけむって、息でもかけたように見え、また、たくさんのりんどうの花が、草をかくれたり出たりするのは、やさしい狐火きつねびのように思われました。

それもほんのちよつとの間、川と汽車との間は、すすきの列でさえぎられ、白鳥の島は、二度ばかり、うしろの方に見えましたが、じきもうずうつと遠く小さく、絵のようになつてしまい、またすすきがざわざわ鳴って、とうとうすっかり見えなくなつてしまいました。

ジョバンニのうしろには、いつから乗っていたのか、せいの高い、黒いかつぎをしたカトリック風の尼あまさんが、まん円な緑の瞳ひまを、じつとまつすぐに落して、まだ何かことばか声かが、そつちから伝わって来るのを、度つつしんで聞いているというように見えました。旅人たちはしずかに席せどに戻り、二人も胸いっばいのかなしみに似た新らしい気持ちを、何気なくちがった語ことばで、そつと談はなし合つたのです。

「もうじき白鳥の停車場だねえ。」

「ああ、十一時かつきりには着くんだよ。」

早くも、シグナルの緑の燈と、ぼんやり白い柱とが、ちらつと窓のそとを過ぎ、それから硫黄いおうのほのおのようなくらいぼんやりした転てつ機の前のあかりが窓の下を通り、汽車はだんだんゆるやかになって、間もなくプラットホームの一系列の電燈が、うつくしく規則正しくあらわれ、それがだんだん大きくなってひろがって、二人は丁度白鳥停車場の、大きな時計の前に来てとまりました。

さわやかな秋の時計の盤面ダイヤルには、青く灼かれたはがねの二本の針が、くつきり十一時を指しました。みんなは、一ぺんに下りて、車室の中はがらんとなくなりました。

「二十分停車」と時計の下に書いてありました。

「ぼくたちも降りて見ようか。」ジヨバンニが云いました。

「降りよう。」

二人は一度にはねあがつてドアを飛び出して改札口かいさつぐちへかけて行きました。ところが改札口には、明るい紫むらさきがかった電燈が、一つ点ついているばかり、誰も居たりませんでした。そこら中を見ても、駅長や赤帽あかぼうらしい人の、影かげもなかったのです。

二人は、停車場の前の、水晶細工のように見える銀杏いちょうの木に囲まれた、小さな広場に出ました。そこから幅はばの広いみちが、まっすぐに銀河の青光の中へ通っていきました。

さきに降りた人たちは、もうどこへ行ったか一人も見えませんでした。二人がその白い道を、肩をならべて行きますと、二人の影は、ちょうど四方に窓のある室の中の、二本の柱の影のように、また二つの車輪の輻のように幾本も幾本も四方へ出るのです。そして間もなく、あの汽車から見えたきれいな河原にきました。

カムパネルラは、そのきれいな砂を一つまみ、掌にひろげ、指できしきしさせながら、夢のように云っているのです。

「この砂はみんな水晶だ。中で小さな火が燃えている。」

「そうだ。」どこでぼくは、そんなこと習ったろうと思ひながら、ジヨバンニもぼんやり答えていました。

河原の礫は、みんなすきとおつて、たしかに水晶や黄玉や、またくしゃくしゃの皺曲をあらわしたのや、また稜から霧のような青白い光を出す鋼玉やらでした。ジヨバンニは、走つてその渚に行つて、水に手をひたしました。けれどもあやしいその銀河の水は、水素よりもっとすきとおつていたのです。それでもたしかに流れていたことは、二人の手首の、水にひたつたところが、少し水銀いろに浮いたように見え、その手首にぶつかつてできた波は、うつくしい燐光をあげて、ちらちらと燃えるように見えたのもわかりました。

川上の方を見ると、すすきのいっぱいに見える崖の下に、白い岩が、まるで運動場のように平らに川に沿って出ているのでした。そこに小さな五六人の人かげが、何か掘り出すか埋めるかしているらしく、立ったり屈んだり、時々なにかの道具が、ピカツと光ったりしました。

「行ってみよう。」二人は、まるで一度に叫んで、そっちの方へ走りました。その白い岩になった処の入口に、

「プリオシン海岸」という、瀬戸物のつるつるした標札が立って、向うの渚には、ところどころ、細い鉄の欄干も植えられ、木製のきれいなベンチも置いてありました。

「おや、変なものがあるよ。」カムパネルラが、不思議そうに立ちどまって、岩から黒い細長いさきの尖ったくるみの実のようなものをひろいました。

「くるみの実だよ。そら、沢山ある。流れて来たんじゃない。岩の中に入ってるんだ。」

「大きいね、このくるみ、倍あるね。こいつはすこしもいたんでない。」

「早くあそこへ行ってみよう。きつと何か掘ってるから。」

二人は、ぎざぎざの黒いくるみの実を持ちながら、またさつきの方へ近よって行きました。左手の渚には、波がやさしい稲妻のように燃えて寄せ、右手の崖には、いちめん銀や貝殻

でこさえたようなすすきの穂ほがゆれたのです。

だんだん近付いて見ると、一人のせいの高い、ひどい近眼鏡をかけ、長靴ながぐつをはいた学者らしい人が、手帳に何かせわしそうに書きつけながら、鶴嘴つるはしをふりあげたり、スコープをつかたりしている、三人の助手らしい人たちに夢中むちゅうでいろいろ指図さしずをしていました。

「そのその突起とつきを壊こわさないように。スコープを使いたまえ、スコープを。おっと、もし遠くから掘ほって。いけない、いけない。なぜそんな乱暴らんぼうをするんだ。」

見ると、その白い柔やわらかな岩の中から、大きな大きな青じろい獣けものの骨が、横たおに倒たおれて潰つぶれたという風ふうになって、半分以上掘り出されていました。そして気をつけて見ると、そこらには、蹄ひづめの二つある足跡あしあとのついた岩が、四角に十ばかり、きれいに切り取られて番号がつけられてありました。

「君たちは参観まかんかね。」その大学士らしい人が、眼鏡めがねをきらっとさせて、こつちを見て話しかけました。

「くるみが沢山あつたらう。それはまあ、ざっと百二十年ぐらい前のくるみだよ。ごく新らしい方かたさ。ここは百二十万年前、第三紀のあとのころは海岸でね、この下からは貝かいがらも出る。いま川の流れているところに、そっくり塩水が寄せたり引いたりもしていたのだ。」

このけものかね、これはボスといってね、おいおい、そこつるはしはよしたまえ。ていねいに鑿のみでやつてくれたまえ。ボスといってね、いまの牛の先祖で、昔むかしはたくさん居たさ。」
「標本にするんですか。」

「いや、証明するに要いるんだ。ぼくらから見ると、ここは厚い立派な地層で、百二十万年前にできたという証拠しやうこもいろいろあるけれども、ぼくらとちがったやつからみてもやつぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風か水やがらんとした空かに見えるやしないかということなのだ。わかったかい。けれども、おいおい。そこもスコップではない。そのすぐ下に肋骨ろっこつが埋もれてる筈はずじゃないか。」
「もう時間だよ。行こう。」カムパネルラが地図と腕時計うでどけいとをくらべながら云いました。

「ああ、ではわたくしどもは失礼いたします。」
「ジョバンニは、ていねいに大学士におじぎしました。」

「そうですか。いや、さよなら。」
「大学士は、また忙いそがしそうに、あちこち歩きまわって監督かんとくをはじめました。二人は、その白い岩の上を、一生けん命汽車におくれないように走りまわりました。そしてほんとうに、風のように走れたのです。息も切れず膝ひざもあつくありませんでした。」

こんなにしてかけるなら、もう世界中だつてかけれると、ジョバンニは思いました。そして二人は、前のあの河原を通り、改札口の電燈がだんだん大きくなって、間もなく二人は、もとの車室の席に座^{すわ}つて、いま行つて来た方を、窓から見えました。

八、鳥を捕る人

「ここへかけてもようございますか。」

がさがさした、けれども親切そうな、大人の声が、二人のうしろで聞えました。

それは、茶いろの少しぼろぼろの外套がいとうを着て、白い巾きれでつつんだ荷物を、二つに分けて肩かに掛けた、赤髯あかひげのせなかのかがんだ人でした。

「ええ、いいんです。」ジョバンニは、少し肩をすぼめて挨拶あいさつしました。その人は、ひげの
中なかでかすかに微笑わらいながら荷物をゆっくり網棚あみだなにのせました。ジョバンニは、なにか大へ
んさびしいようなかなしいような気がして、だまって正面の時計を見ていましたら、ずう
つと前まへの方かたで、硝子ガラスの笛ふえのようなものが鳴りました。汽車はもう、しずかにうごいていた
のです。カムパネルラは、車室くるまむらの天井てんじやうを、あちこち見ていました。その一つのあかりに黒
い甲虫かぶとむしがとまってその影が大きく天井にうつつていたのです。赤ひげの人は、なにかなつ

かしそうにわらいながら、ジヨバンニやカムパネルラのようなすを見ていました。汽車はもうだんだん早くなって、すすきと川と、かわるがわる窓の外から光りました。

赤ひげの人が、少しおずおずしながら、二人に訊ききました。

「あなた方は、どちらへいらつしやるんですか。」

「どこまでも行くんです。」ジヨバンニは、少しきまり悪そうに答えました。

「それはいいね。この汽車は、じつさい、どこまでも行きますぜ。」

「あなたはどこへ行くんです。」カムパネルラが、いきなり、喧嘩けんかのようにたずねましたので、ジヨバンニは、思わずわらいました。すると、向うの席に居た、尖った帽子をかぶり、大きな鍵かぎを腰こしに下げた人も、ちらっとこつちを見てわらいましたので、カムパネルラも、つい顔を赤くして笑いだしてしまいました。ところがその人は別に怒おこったでもなく、頬ほほをびくびくしながら返事しました。

「わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥をつかまえる商売でね。」

「何鳥ですか。」

「鶴や雁がんです。さぎも白鳥もです。」

「鶴はたくさんいますか。」

「居ますとも、さつきから鳴いてまさあ。聞かなかったのですか。」

「いいえ。」

「いまでも聞えるじやありませんか。そら、耳をすまして聴いてごらんなさい。」

二人は眼を挙げ、耳をすましました。ごとごと鳴る汽車のひびきと、すすきの風との間から、ころんころんと水の湧くような音が聞えて来るのでした。

「鶴、どうしてとるんですか。」

「鶴ですか、それとも鷺ですか。」

「鷺です。」ジヨバンニは、どっちでもいいと思いつながら答えました。

「そいつはな、雑作ない。さぎというものは、みんな天の川の砂が凝って、ぼおつとできるもんですからね、そして始終川へ帰りますからね、川原で待っていて、鷺がみんな、脚をこういう風にして下りてくるところを、そいつが地べたへつくつかないうちに、びたと押えちまうんです。するともう鷺は、かたまつて安心して死んじまいます。あとはもう、わかり切つてまさあ。押し葉にするだけです。」

「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか。」

「標本じゃありません。みんなたべるじやありませんか。」

「おかしいねえ。」カムパネルラが首をかしげました。

「おかしいも不審ふしんありませんや。そら。」その男は立って、網棚から包みをおろして、手ばやくくるくると解きました。

「さあ、ごらんなさい。いまとつて来たばかりです。」

「ほんとうに驚だねえ。」二人は思わず叫さけびました。まっ白な、あのさっきの北の十字架じゅうじかのように光る驚のからだだが、十ばかり、少しひらべったくなくなって、黒い脚をちぢめて、浮彫うきぼりのようにならんでいたのです。

「眼をつぶってるね。」カムパネルラは、指でそっと、驚の三日月がたの白い瞑つむぎった眼にさわりました。頭の上の槍やりのような白い毛もちゃんとついていました。

「ね、そうでしょう。」鳥捕りは風呂敷ふろしきを重ねて、またくるくると包んで紐ひもでくくりました。誰たれがいったいここで驚なんぞ喰たべるだろうとジヨバンニは思いながら訊きました。

「驚はおいしいんですか。」

「ええ、毎日注文があります。しかし雁がんの方が、もっと売れます。雁の方がずっと柄がらがいしいし、第一手数がありませんからな。そら。」鳥捕りは、また別の方の包みを解きました。すると黄と青じろとまだらになって、なにかのあかりのようにひかる雁が、ちようどさつ

きの鷲のように、くちばしを揃えて、少し扁べったくなくなって、ならんでいました。

「こつちはすぐ喰べられます。どうです、少しおあがりなさい。」鳥捕りは、黄いろな雁の足を、軽くひっぱりました。するとそれは、チョコレートでもできているように、すつときれいにはなれました。

「どうです。すこしたべてごらんなさい。」鳥捕りは、それを二つにちぎってわたししました。

ジヨバンニは、ちよつと喰べてみて、（なんだ、やっぱりこいつはお菓子だ。チョコレートよりも、もつとおいしいけれども、こんな雁が飛んでいるもんか。この男は、どこかこちらの野原の菓子屋だ。けれどもぼくは、このひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべているのは、大へん気の毒だ。）とおもいながら、やっぱりぼくぼくそれをたべていました。

「も少しおあがりなさい。」鳥捕りがまた包みを出しました。ジヨバンニは、もつとたべたかったのですけれども、

「ええ、ありがとう。」と云って遠慮しましたら、鳥捕りは、こんどは向うの席の、鍵をもつた人に出しました。

「いや、商売ものを貰っちゃすみませんな。」その人は、帽子をとりました。

「いいえ、どういたしました。どうです、今年の渡り鳥の景気は。」

「いや、すてきなもんですよ。一昨日の第二限ころなんか、なぜ燈台の灯を、規則以外に間 させるかって、あっちからもこっちからも、電話で故障が来ましたが、なめに、こっちがやるんじゃないやなくて、渡り鳥どもが、まっ黒にかたまつて、あかしの前を通るのですから仕方ありませんや。わたしあ、べらぼうめ、そんな苦情は、おれのとこへ持つて来たつて仕方がねえや、ばさばさのマントを着て脚と口との途方もなく細い大将へやれつて、斯う云つてやりましたがね、はっは。」

すすきがなくなつたために、向うの野原から、ぱつとあかりが射して来ました。

「鷺の方はなぜ手数なんですか。」カムパネルラは、さつきから、訊こうと思つていたのです。

「それはね、鷺を喰べるには、」鳥捕りは、こつちに向き直りました。

「天の水の水あかりに、十日もつるして置くかね、そうでなけあ、砂に三四日うずめなけあいけないんだ。そうすると、水銀がみんな蒸発して、喰べられるようになるよ。」

「こいつは鳥じゃない。ただのお菓子でしょう。」やっばりおなじことを考えていたとみえて、カムパネルラが、思い切つたというように、尋ねました。鳥捕りは、何か大へんあわ

てた風で、

「そうそう、ここで降りなけあ。」と云いながら、立って荷物をとったと思うと、もう見えなくなっていました。

「どこへ行ったんだろう。」

二人は顔を見合せましたら、燈台守は、にやにや笑って、少し伸びあがるようにしながら、二人の横の窓の外をのぞきました。二人もそつちを見ましたら、たつたいまの鳥捕りが、黄いろと青じろの、うつくしい燐光を出す、いちめんのかわらははこぐさの上に立って、まじめな顔をして両手をひろげて、じつとそらを見ていたのです。

「あすこへ行ってる。ずいぶん奇体だねえ。きつとまた鳥をつかまえるとこだねえ。汽車が走って行かないうちに、早く鳥がおけるといいな。」と云った途端、がらんとした桔梗いろの空から、さつき見たような鷺が、まるで雪の降るように、ぎやあぎやあ叫びながら、いっぱいまに舞いおりて来ました。するとあの鳥捕りは、すっかり注文通りだというようにほくほくして、両足をかつきり六十度に開いて立って、鷺のちぢめて降りて来る黒い脚を両手で片かたつ端はしから押えて、布の袋かぶの中なに入れるのでした。すると鷺は、蛍はたるのように、袋の中なでしばらく、青く。か。か。光あったり消えたりしていましたが、おしまいとうとう、みん

なぼんやり白くなって、眼をつぶるのでした。ところが、つかまえられる鳥よりは、つかまえられるので無事に天の川の砂の上に降りるものの方が多かったのです。それは見ていると、足が砂へつくや否や、まるで雪の融けるように、縮まって扁べったくなって、間もなく熔鉱炉から出た銅の汁のように、砂や砂利の上にひろがり、しばらくは鳥の形が、砂についているのですが、それも二三度明るくなったり暗くなったりしているうちに、もうすっかりまわりと同じいろになってしまうのでした。

鳥捕りは二十一疋ばかり、袋に入れてしまうと、急に両手をあげて、兵隊が鉄砲弾にあたって、死ぬときのような形をしました。と思ったら、もうそこに鳥捕りの形はなくなつて、却つて、

「ああせいせいした。どうもからだに恰度合うほど稼いでいるくらい、いいことはありませんな。」というききおぼえのある声が、ジヨバンニの隣りにしました。見ると鳥捕りは、もうそこできつて来た鷺を、きちんとそろえて、一つずつ重ね直しているのでした。

「どうしてあすこから、いつべんにもここへ来たんですか。」ジヨバンニが、なんだかあたりまえのような、あたりまえでないような、おかしな気がして問いました。

「どうしてつて、来ようとしたから来たんです。ぜんたいあなた方は、どちらからおいで

ですか。」

「ジョバンニは、すぐ返事しようと思いましたけれども、さあ、ぜんたいどこから来たのか、もうどうしても考えつきませんでした。カムパネルラも、顔をまっ赤にして何か思いつき出してはいるのでした。」

「ああ、遠くからですね。」鳥捕りは、わかったというように雑作なくうなずきました。

九、ジョバンニの切符きっぷが

「もうここらは白鳥区のおしまいです。ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観測所です。」

窓の外の、まるで花火でいっぱいのような、あまの川のまん中に、黒い大きな建物が四棟むねばかり立って、その一つの平屋根の上に、眼めもさめるような、青宝玉サファイアと黄玉トピルスの大きな二つのすきとおった球が、輪わになってしずかにくるくるとまわっていました。黄いろのがだんだん向うへまわって行って、青い小さいのがこつちへ進んで来、間もなく二つのはじは、重なり合って、きれいな緑いろの両面一凸とつレンズのかたちをつくり、それもだんだん、まん中がふくらみ出して、とうとう青いのは、すっかりトパスの正面に來ましたので、緑の中心と黄いろな明るい環わとができました。それがまただんだん横へ外それて、前のレンズの形を逆に繰くり返し、とうとうすつとはなれて、サファイアは向うへめぐり、黄いろの

はこっちへ進み、また丁度さっきのような風になりました。銀河の、かたちもなく音もない水にかこまれて、ほんとうにその黒い測候所が、睡ねむっているように、しずかによこたわったのです。

「あれは、水の速さをはかる器械です。水も……。」鳥捕とりとりが云いかけたとき、「切符を拝見いたします。」三人の席の横に、赤い帽子ぼうしをかぶったせいの高い車掌が、いつかまっすぐに立っていて云いました。鳥捕りは、だまつてかくしから、小さな紙きれを出しました。車掌はちよつと見て、すぐ眼をそらして、（あなた方のは？）というように、指をうごかしながら、手をジョバンニたちの方へ出しました。

「さあ、」ジョバンニは困こまって、もじもじしていましたら、カムパネルラは、わけもないという風で、小さな鼠ねずみいろの切符を出しました。ジョバンニは、すっかりあわててしまつて、もしか上着のポケットにでも、入っていたかとおもいながら、手を入れて見ましたら、何か大きな畳たたんだ紙きれにあたりました。こんなもの入っていたらかと思つて、急いで出してみましたら、それは四つに折つたはがきぐらいの大きさの緑いろの紙でした。車掌が手を出しているもんですから何でも構かまわらない、やつちまえと思つて渡わたしましたら、車掌はまっすぐに立ち直ただつて叮寧ていねいにそれを開いて見ていました。そして読みながら上着のぼたん

やなんかしきりに直したりしていましたし燈台看守も下からそれを熱心にのぞいていましたから、ジョバンニはたしかにあれは証明書か何かだったと考えて少し胸が熱くなるような気がしました。

「これは三次空間の方からお持ちになったのですか。」車掌がたずねました。

「何だかわかりません。」もう大丈夫だと安心しながらジョバンニはそつちを見あげてくつくつ笑いました。

「よろしゅうございます。南十字サウザンクロスへ着きますのは、次の第三時ころになります。」車掌は紙をジョバンニに渡して向うへ行きました。

カムパネルラは、その紙切れが何だったか待ち兼ねたというように急いでのできこみました。ジョバンニも全く早く見たかったです。ところがそれはいちめん黒い唐草からくきのような模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷したものでだまって見ていると何だかその中へ吸い込まれてしまうような気がするのです。すると鳥捕りが横からちらつとそれを見てあわてたように云いました。

「おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、ほんとうの天上へさえ行ける切符だ。天上どこじゃない、どこでも勝手にあるける通行券です。こいつをお持ちになれば、なる

「ほど、こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこまででも行ける筈でさあ、あなた方大したもんですね。」

「何だかわかりません。」ジョバンニが赤くなって答えながらそれを又畳んでかくしに入れました。そしてきまりが悪いのでカムパネルラと二人、また窓の外をながめていましたが、その鳥捕りの時々大したもんだというようにちらちらこつちを見ているのがぼんやりわかりました。

「もうじき驚の停車場だよ。」カムパネルラが向う岸の、三つならんだ小さな青じろい三角標と地図とを見較べて云いました。

ジョバンニはなんだかわけもわからずにわかにとなりの鳥捕りが気の毒でたまらなくなりしました。驚をつかまえてせいせいしたとよろこんだり、白いきれでそれをくるくる包んだり、ひとの切符をびっくりしたように横目で見てあわててほめだしたり、そんなことを一一考えていると、もうその見ず知らずの鳥捕りのために、ジョバンニの持っているものでも食べるものでもなんでもやっつけてしまいたい、もうこの人のほんとうの幸になるなら自分があの光る天の川の河原に立って百年つづけて立って鳥をとってやってもいいというような気がして、どうしても黙っていられなくなりました。ほんとうにあなたのほし

いものは一体何ですか、と訊こうとして、それではあんまり出し抜けだから、どうしようかと考えて振り返って見ましたら、そこにはもうあの鳥捕りが居ませんでした。網棚の上には白い荷物も見えなかったのです。また窓の外で足をふんばってそらを見上げて驚を捕る支度したくをしているのかと思つて、急いでそつちを見ましたが、外はいちめんのうつくしい砂子と白いすすきの波ばかり、あの鳥捕りの広いせなかも尖とがった帽子も見えませんでした。「あの入どこへ行つたらう。」カムパネルラもぼんやりそう云つていました。「どこへ行つたらう。一体どこでまたあうのだろう。僕はどうしても少しあの人に物を言わなかつたらう。」

「ああ、僕もそう思っているよ。」

「僕はある人が邪魔じやまなような気がしたんだ。だから僕は入へんつらい。」ジョバンニはこんな変てこな気もちは、ほんとうにはじめてだし、こんなこと今まで云つたこともないと思いました。

「何だか苹果りんごの匂においがする。僕いま苹果のこと考えたためだろうか。」カムパネルラが不思議そうにあたりを見まわしました。

「ほんとうに苹果の匂だよ。それから野茨のいばらの匂もする。」ジョバンニもそこらを見ましたが

やっぱりそれは窓からでも入って来るらしいのでした。いま秋だから野茨の花の匂のする筈はないとジョバンニは思いました。

そしたら俄かにそこに、つやつやした黒い髪の毛の六つばかりの男の子が赤いジャケットのぼたんもかけずひどくびっくりしたような顔をしてがたがたふるえてはだしで立っていました。隣りには黒い洋服をきちんと着たせいの高い青年が一ぱいに風に吹かれていた。木のような姿勢で、男の子の手をしっかりとひいて立っていました。

「あら、ここどこでしょう。まあ、きれいだわ。」青年のうしろにもひとり十二ばかりの眼の茶いろな可愛らしい女の子が黒い外套を着て青年の腕にすがって不思議そうに窓の外を見ているのでした。

「ああ、ここはランカシャイヤだ。いや、コンネクテカツト州だ。いや、ああ、ぼくたちはそらへ来たのだ。わたしたちは天へ行くのです。ごらんなさい。あのしるしは天上のしるしです。もうなんにもこわいことありません。わたくしたちは神さまに召さされているのです。」黒服の青年はよろこびにかがやいてその女の子に云いました。けれどもなぜかまた額に深く皺を刻んで、それに大へんつかれているらしく、無理に笑いながら男の子をジョバンニのとなりに座らせました。

それから女の子にやさしくカムパネルラのとりの席を指さしました。女の子はすなおにそこへ座って、きちんと両手を組み合せました。

「ぼくとおおねえさんのとこへ行くんだよう。」腰掛けたばかりの男の子は顔を変にして燈台看守の向うの席に座ったばかりの青年に云いました。青年は何とも云えず悲しそうな顔をして、じつとその子の、ちぢれてぬれた頭を見ました。女の子は、いきなり両手を顔にあててしくしく泣いてしまいました。

「お父さんやきくよねえさんはまだいろいろお仕事があるのです。けれどももうすぐあとからいらっしやいます。それよりも、おつかさんはどんなに永く待っていらっしやったでしょう。わたしの大事なタダシはいまどんな歌をうたっているだろう、雪の降る朝にみんなと手をつないでぐるぐるにわとこのやぶをまわってあそんでいるだろうかと考えたりほんとうに待って心配していらっしやるんですから、早く行っておつかさんにお目にかかりましょうね。」

「うん、だけど僕、船に乗らなけあよかつたなあ。」

「ええ、けれど、ごらんなさい、そら、どうです、あの立派な川、ね、あすこはあの夏中、ツインクル、ツインクル、リトル、スター をうたってやすむとき、いつも窓からぼんや

り白く見えていたでしょう。あすこですよ。ね、きれいでしょう、あんなに光っています。」泣いていた姉もハンケチで眼をふいて外を見ました。青年は教えるようにそっと姉弟にまた云いました。

「わたしたちはもうなんにもかなしいことないのです。わたしたちはこんないいところを旅して、じき神さまのとこへ行きます。そこならもうほんとうに明るくて匂がよくて立派な人たちでいっぱいです。そしてわたしたちの代りにボートへ乗れた人たちは、きつとみんな助けられて、心配して待っているめいめいのお父さんやお母さんや自分のお家へやら行くのです。さあ、もうじきですから元氣を出しておもしろくうたつて行きましょう。」青年は男の子のぬれたような黒い髪をなで、みんなを慰めながら、自分もだんだん顔いろがかがやいて来ました。

「あなた方はどちらからいらつしゃったのですか。どうなすつたのですか。」さっきの燈台看守がやつと少しわかったように青年にたずねました。青年はかすかにわらいました。

「いえ、氷山にぶつつかって船が沈シズみましてね、わたしたちはこちらのお父さんが急な用で二ヶ月前一足さきに本国へお帰りになったのであとから発たつたのです。私は大学へはい

っていて、家庭教師にやとわれていたのです。ところがちょうど十二日目、今日か昨日のあたりです、船が氷山にぶつかって一ぺんに傾きもう沈みかけました。月のあかりはどこかぼんやりありましたが、霧が非常に深かったのです。ところがボートは左舷の方半分はもうだめになっていましたから、とてもみんなは乗り切らないのです。もうそのうちにも船は沈みますし、私は必死となって、どうか小さな人たちを乗せて下さいと叫びました。近くの人たちはすぐみちを開いてそして子供たちのために祈つて呉れました。けれどもそこからボートまでのところにはまだまだ小さな子どもたちや親たちやなんか居て、とても押しのける勇気がなかったのです。それでもわたくしはどうしてもこの方たちをお助けするのが私の義務だと思いましたが前にいる子供らを押しつけようとしました。けれどもまたそんなにして助けてあげるよりはこのまま神のお前にみんなで行く方がほんとうにこの方たちの幸福だとも思いました。それからまたその神にそむく罪はわたくしひとりです。よってぜひとも助けてあげようと思いました。けれどもどうして見ているとそれができないのでした。子どもらばかりボートの中へはなしてやってお母さんが狂気のようにキスを送りお父さんがかなしいのをじっとこらえてまっすぐに立っているなどとてももう腸もちぎれるようでした。そのうち船はもうずんずん沈みますから、私はもうすっかり覚悟し

てこの人たち二人を抱いて、浮べるだけは浮ぼうとかたまって船の沈むのを待っていました。誰が投げたカライフブイが一つ飛んで来ましたが、滑ってずうつと向うへ行つてしまいました。私は一生けん命で甲板の格子になつたとこをはなして、三人それにしつかりとりつきました。どこからともなく、番の声があがりました。たちまちみんなはいろいろな国語で一ぺんにそれをうたいました。そのとき俄かに大きな音がして私たちは水に落ちもう渦に入つたと思ひながらしつかりこの人たちをだいてそれからぼうつと思つたらもうここへ来ていたのです。この方たちのお母さんは一昨年没くなられました。ええボートはきつと助かったにちがいありません、何せよほど熟練な水夫たちが漕いですばやく船からはなれていましたから。」

そこから小さないのりの声が聞えジョバンニもカムパネルラもいままで忘れていたいろいろのことをぼんやり思い出して眼が熱くなりました。

（ああ、その大きな海はパシフィックというのではなかつたらうか。その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗って、風や凍りつく潮水や、烈しい寒さとたたかつて、たれかが一生けんめいはたらいっている。ぼくはそのひとにほんとうに気の毒でそしてすまないような気がする。ぼくはそのひとのさいわいのためにいったいどうしたらいいのだらう。）

ジヨバンニは首を垂れて、すっかりふさぎ込んでしまいました。

「なにがしあわせかわからないです。ほんとうにどんなつらいことでもそれがただしいみちを進む中でできごとなら峠たけの上りも下りもみんなほんとうの幸福に近づく一あしずつですから。」

燈台守がなぐさめていました。

「ああそうです。ただいちばんのさいわいに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼしめしです。」

青年が祈るようにそう答えました。

そしてあの姉弟きょうだいはもうつかれてめいめいぐったり席によりかかって睡ねむっていました。さっきのあのはだしだった足にはいつか白い柔やわらかな靴くつをはいていたのです。

ごとごとごとごとと汽車はきらびやかな燐光りんこうの川の岸を進みました。向うの方の窓を見ると、野原はまるで幻燈げんとうのようでした。百も千もの大きささまの三角標、その大きなものの上には赤い点をうった測量旗も見え、野原のはてはそれらがいちめん、たくさんたくさん集ってぼおつと青白い霧きりのよう、そこからかまはもつと向うからかときどきさまさまの形のぼんやりした狼煙のろしのようなもの、かわるがわるきれいな桔梗ききょういろのそらにうち

あげられるのでした。じつにそのすきとおった奇麗な風は、ばらの匂でいっぱいでした。「いかがですか。こういう苹果はおはじめでしよう。」向うの席の燈台看守がいつか黄金と紅でうつくしくいろどられた大きな苹果を落さないように両手で膝の上にかかえていました。

「おや、どつから来たのですか。立派ですなえ。ここらではこんな苹果ができるのですか。」青年はほんとうにびっくりしたらしく燈台看守の両手にかかえられた一もりの苹果を眼を細くしたり首をまげたりしながらわれを忘れてながめていました。

「いや、まあおとり下さい。どうか、まあおとり下さい。」

青年は一つとつてジョバンニたちの方をちよつと見ました。

「さあ、向うの坊ちゃんがた。いかがですか。おとり下さい。」

ジョバンニは坊ちゃんといわれたのですこししゃくにさわってだまっていましたでしたがカムパネルラは

「ありがとうございます」と云いました。すると青年は自分でとつて一つずつ二人に送ってよこしましたのでジョバンニも立ってありがとうございますと云いました。

燈台看守はやつと両腕があいたのでこんどは自分で一つずつ睡っている姉弟の膝にそつ

と置きました。

「どうもありがとう。どこでできるのですか。こんな立派な苹果は。」

青年はつくづく見ながら云いました。

「この辺ではもちろん農業はいたしませんけれども大ていひとりでいいものができるとな約束やくそくになつて居おります。農業だつてそんなに骨は折れはしません。たいてい自分の望ねむ種子たねさえ播まげばひとりでいんどんできます。米だつてパシフィック辺のように殻かもないし十倍も大きくて匂もいいのです。けれどもあなたがたのいらつしやる方なら農業はもうありません。苹果だつてお菓子だつてかすが少しもありませんからみんなそのひとそのひとによつてちがつたわずかのいいかおりになつて毛あなからちらけてしまうのです。」

にわかになつて男の子がぼつちり眼をあいて云いました。

「ああぼくいまお母さんの夢ゆめをみていたよ。お母さんがね立派な戸棚とだなや本のあるところに居てね、ぼくの方を見て手をだしてにこにこにこにこわらつたよ。ぼくおつかさん。りんごをひろつてきてあげましょうか云つたら眼がさめちやつた。ああここさっきの汽車のなかだねえ。」

「その苹果りんごがそこにあります。このおじさんにいただいたのですよ。」青年が云いました。

「ありがとうおじさん。おや、かおるねえさんまだねてるねえ、ぼくおこしてやろう。ねえさん。ごらん、りんごをもらつたよ。おきてごらん。」

姉はわらつて眼をさましまぶしそうに両手を眼にあててそれから苹果を見ました。男の子はまるでパイを喰べるようにもうそれを喰べていました、また折角剥いたそのきれいな皮も、くるくるコルク抜きのような形になって床へ落ちるまでの間にはすうっと、灰いろに光つて蒸発してしまふのでした。

二人はりんごを大切にポケットにしまいました。

川下の向う岸に青く茂つた大きな林が見え、その枝には熟してまつ赤に光る円い実がいつぱい、その林のまん中に高い高い三角標が立つて、森の中からはオーケストラベルやジロフォンにまじつて何とも云えずきれいな音いろが、とけるように浸みるように風につれて流れて来るのでした。

青年はぞくつとしてからだをふるうようにしました。

だまつてその譜を聞いていると、そこらにいちめん黄いろやうすい緑の明るい野原か敷物かがひろがり、またまつ白な蟬のような露が太陽の面を擦めて行くように思われました。

「まあ、あの鳥。」カムパネルラのとおりのかおると呼ばれた女の子が叫びました。

「からすでない。みんなかささぎだ。」カムパネルラがまた何気なく叱るしかように叫びましたので、ジョバンニはまた思わず笑い、女の子はきまり悪そうにしました。まったく河原かわらの青じろいあかりの上に、黒い鳥がたくさんたくさんいっぱい列になつてとまってじつと川の微光びこうを受けているのでした。

「かささぎですねえ、頭のうしろのところに毛がぴんと延びてますから。」青年はとりなすように云いました。

向うの青い森の中の三角標はすっかり汽車の正面にきました。そのとき汽車のずうつとうしろの方からあの聞きなれた 番の讚美歌さんびかのふしが聞えてきました。よほどの人数で合唱しているらしいのでした。青年はさつと顔いろが青ざめ、たつて一ぺんそちへ行きそうにしましたが思いかえしてまた座すわりました。かおる子はハンケチを顔にあててしまいました。ジョバンニまで何だか鼻が変になりました。けれどもいつももなく誰たれともなくその歌は歌い出されだんだんはつきり強くなりました。思わずジョバンニもカムパネルラも一緒いっしょにうたい出したのです。

そして青い橄欖かんらんの森が見えない天の川の向うにさめざめと光りながらだんだんうしろの方へ行ってしまうそこから流れて来るあやしい楽器の音ももう汽車のひびきや風の音にす

り耗へらされてずうつとかすかになりました。

「あ孔雀くわんくわが居るよ。」

「ええたくさん居たわ。」女の子がこたえました。

ジョバンニはその小さく小さくなつていまはもう一つの緑いろの貝ぼたんのように見える森の上にさっさつと青じろく時々光つてその孔雀がはねをひろげたりとじたりする光の反射を見ました。

「そうだ、孔雀の声だつてさっき聞えた。」カムパネルラがかおる子に云いいました。

「ええ、三十一疋びきぐらいはたしかに居たわ。ハープのように聞えたのはみんな孔雀よ。」女の子が答えました。ジョバンニは俄にわかに何とも云えずかなしい気がして思わず

「カムパネルラ、ここからはねおりて遊んで行こうよ。」とこわい顔をして云おうとしたくらいでした。

川は二つにわかれました。そのまっくらな島のまん中に高い高いやぐらが一つ組まれてその上に一人の寛ゆかい服を着て赤い帽子ぼうしをかぶった男が立っていました。そして両手に赤と青の旗をもつてそれを見上げて信号して行っていました。ジョバンニが見ている間その人はしきりに赤い旗をふっていました。が俄かに赤旗をおろしてうしろにかくすようにし青い旗

を高く高くあげてまるでオーケストラの指揮者のように烈しく振りまわした。すると空中にざあつと雨のような音がして何かまつくらなものがいくかたまりもいくかたまりも鉄砲丸のように川の向うの方へ飛んで行くのでした。ジョバンニは思わず窓からからだを半分出してそつちを見あげました。美しい美しい桔梗いろのがらんとした空の下を実に何万という小さな鳥どもが幾組も幾組もめいめいせわしくせわしく鳴いて通って行くのでした。

「鳥が飛んで行くな。」ジョバンニが窓の外で云いました。

「どら、」カムパネルラもそらを見ました。そのときあのやぐらの上のゆるい服の男は俄かに赤い旗をあげて狂気のようにふりうごかしました。するとびたつと鳥の群は通らなくなりそれと同時にぴしゃあんという潰れたような音が川下の方で起つてそれからしばらくしんとしました。と思つたらあの赤帽の信号手がまた青い旗をふつて叫んでいたのです。

「いまこそわたれわたり鳥、いまこそわたれわたり鳥。」その声もはつきり聞えました。それといつしよにまた幾万という鳥の群がそらをまっすぐにかけたのです。二人の顔を出しているまん中の窓からあの女の子が顔を出して美しい頬をかがやかせながらそらを仰ぎました。

「まあ、この鳥、たくさんですわねえ、あらまあそのきれいなこと。」女の子はジョバン

ニにはなしかけましたけれどもジョバンニは生意気ないやだいたい思いながらだまつて口をむすんでそらを見あげていました。女の子は小さくほつと息をしてだまつて席へ戻りました。カムパネルラが気の毒そうに窓から顔を引つ込めて地図を見ていました。

「あの人鳥へ教えてるんでしようか。」女の子がそつとカムパネルラにたずねました。

「わたり鳥へ信号してるんです。きつとどこからかのろしがあがるためでしょう。」カムパネルラが少しおぼつかないように答えました。そして車の中はしいんとなりました。ジョバンニはもう頭を引つ込めたかったのですけれども明るいところへ顔を出すのがつらかったのでだまつてこらえてそのまま立つて口笛を吹いていました。

（どうして僕はこんなにかなしいのだろう。僕はもつところもちをきれいに大きくもたなければいけない。あすこの岸のずうつと向うにまるでけむりのような小さな青い火が見える。あれはほんとうにしずかでつめたい。僕はあれをよく見てこのころもちをしずめるんだ。）ジョバンニは熱つて痛いあたまを両手で押えるようにしてそっちの方を見ました。

（ああほんとうにどこまでもどこまでも僕といっしょに行くひとはないだろうか。カムパネルラだつてあんな女の子とおもしろそうに談しているし僕はほんとうにつらいなあ。）ジョバンニの眼はまた涙でいっぱいになり天の川もまるで遠くへ行ったようにぼんやり白く

見えるだけでした。

そのとき汽車はだんだん川からはなれて崖がけの上を通るようになりました。向う岸もまた黒いいろの崖が川の岸を下流に下るにしたがってだんだん高くなって行くのでした。そしてちらつと大きなとうもろこしの木を見ました。その葉はぐるぐるに縮れ葉の下にはもう美しい緑いろの大きな苞ほうが赤い毛を吐はいて真珠のような実もちらつと見えたのでした。それはだんだん数を増して来てもういまは列のように崖と線路との間にならび思わずジョバンニが窓から顔を引つ込めて向う側の窓を見ましたときは美しいそらの野原の地平線のはてまでその大きなとうもろこしの木がほとんどいちめんめんに植えられてさやさや風にゆらぎその立派なちぢれた葉のさきからはまるでひるの間にいっぱい日光を吸った金剛石こんじょうせきのように露つゆがいっぱいについて赤や緑やきらきら燃えて光っているのでした。カムパネルラが「あれとうもろこしだねえ」とジョバンニに云いましたけれどもジョバンニはどうしても気持がなおりませんでしたからだだぶつきり棒に野原を見たまま「そうだろう。」と答えました。そのとき汽車はだんだんしずかになっていくつかのシグナルとてんてつ器の灯を過ぎ小さな停車場にとまりました。

その正面の青じろい時計はかつきり第二時を示しその振りふりこは風もなくなり汽車もうごか

ずしずかなしずかな野原のなかにカチツカチツと正しく時を刻んで行くのでした。

そしてまったくその振子の音のたえまを遠くの遠くの野原のはてから、かすかなかすかな旋律せんりつが糸のように流れて来るのでした。「新世界交響楽こうきょうがくだわ。」姉がひとりごとのようにこつちを見ながらそつと云いました。全くもう車の中ではあの黒服の丈高い青年たけだかも誰もみなやさしい夢ゆめを見ているのでした。

（こんなしずかないところで僕はどうしてもつと愉快ゆかいになれないだろう。どうしてこんなにひとりさびしいのだろう。けれどもカムパネルラなんかあんまりひどい、僕といっしょに汽車に乗っていないがらまるであんな女の子とばかり談はなしているんだもの。僕はほんとうにつらい。）ジョバンニはまた両手で顔を半分かくすようにして向うの窓のそとを見つめていました。すきとおった硝子ガラスのような笛が鳴って汽車はしずかに動き出し、カムパネルラもさびしそうに星めぐりの口笛を吹きました。

「ええ、ええ、もうこの辺はひどい高原ですから。」うしろの方で誰たれかとしよりらしい人のいま眼めがさめたという風ではきはき談している声がしました。

「どうもろこしだつて棒あなで二尺も孔あなをあけておいてそこへ播まかないと生えないんです。」

「そうですか。川まではよほどありませんようかねえ、」

「ええええ河までは二千尺から六千尺あります。もうまるでひどい峡谷きょうくになつてゐるんです。」

そうそうここはコロラドの高原じゃなかつたらうか、ジョバンニは思わずそう思いました。カムパネルラはまださびしそうにひとり口笛を吹き、女の子はまるで絹で包んだ苹果りんごのような顔いろをしてジョバンニの見る方を見てゐるのです。突然とつぜんとうもろこしがなくなつて巨おおきな黒い野原がいつぱいにひられました。新世界交響楽はいよいよはつきり地平線のはてから湧わきそのまっ黒な野原のなかを一人のインデアンが白い鳥の羽根を頭につけたくさんの石を腕うでと胸にかざり小さな弓に矢を番つがえて一目散いちもくさんに汽車を追つて来るのです。

「あら、インデアンですよ。インデアンですよ。ごらんなさい。」

黒服の青年も眼をさました。ジョバンニもカムパネルラも立ちあがりました。

「走つて来るわ、あら、走つて来るわ。追いかけてゐるんですよ。」

「いいえ、汽車を追つてるんじゃないんですよ。獵りようをするか踊おどるかしてゐるんですよ。」青年はいまどこに居るか忘れたという風にポケットに手を入れて立ちながら云いました。

まったくインデアンは半分は踊つてゐるようでした。第一かけるにしても足のふみようがもつと経済もとれ本気にもなれそうでした。にわかにくつきり白いその羽根は前の方へ

倒れるようになりインデアンはびたつと立ちどまってすばやく弓を空にひきました。そこから一羽の鶴がふらふらと落ちて来てまた走り出したインデアンの大きくひろげた両手に落ちこみました。インデアンはうれしそうに立ってわらいました。そしてその鶴をもつてこつちを見ている影ももうどんどん小さく遠くなり電しんばしらの磚子がきらつきらつと続いて二つばかり光つてまたとうもろこしの林になってしまいました。こつち側の窓を見ますと汽車はほんとうに高い高い崖の上を走っていてその谷の底には川がやっぱり幅ひろく明るく流れていたのです。

「ええ、もうこの辺から下りです。何せこんどは一ぺんにあの水面までおりて行くんですから容易じゃありません。この傾斜があるもんですから汽車は決して向うからこつちへは来ないんです。そら、もうだんだん早くなつたでしょう。」さっきの老人らしい声が云いました。

どんどんどん汽車は降りて行きました。崖のはじに鉄道がかかるときは川が明るく下へのぞけたのです。ジョバンニはだんだんこころもちが明るくなって来ました。汽車が小さな小屋の前を通つてその前にしょんぼりひとりの子供が立ってこつちを見ているときなどは思わずほうと叫びました。

どんだんどん自動車は走って行きました。室中のひとたちは半分うしろの方へ倒れるようになりながら腰掛にしつかりしがみついていた。ジヨバンニは思わずカムパネルラとわらいました。もうそして天の川は汽車のすぐ横手をいままでよほど激しく流れて来たらしくときどきちらちら光ってながれているのでした。うすあかい河原なでこの花があちこち咲いていました。汽車はようやく落ちていたようにゆっくりと走っていました。向うとこつちの岸に星のかたちとつるはしを書いた旗がたっていました。

「あれ何の旗だろうね。」ジヨバンニがやっとものを云いました。

「さあ、わからないねえ、地図にもないんだもの。鉄の舟がおいてあるねえ。」

「ああ。」

「橋を架けるとこじゃないんでしうか。」女の子が云いました。

「あああれ工兵の旗だねえ。架橋演習をしてるんだ。けれど兵隊のかたちが見えないねえ。」

その時向う岸ちかくの少し下流の方で見えない天の川の水がぎらっと光って柱のように高くはねあがりどおと烈しい音がしました。

「発破だよ、発破だよ。」カムパネルラはこおどりました。

その柱のようになった水は見えなくなり大きな鮭や鱒がきらつきらっと白く腹を光らせ

て空中に抛り出されて円い輪を描いてまた水に落ちました。ジヨバンニはもうはねあがりたくらい気持が軽くなって云いました。

「空の工兵大隊だ。どうだ、鱒やなんかがるでこんなになつてはねあげられたねえ。僕こんな愉快な旅はしたことない。いいねえ。」

「あの鱒なら近くで見たらこれくらいあるねえ、たくさんさかな居るんだな、この水の中に。」

「小さなお魚もいるんでしょうか。」女の子が談につり込まれて云いました。

「居るんでしょう。大きなのが居るんだから小さいのもいるんでしょう。けれど遠くだけらいま小さいの見えなかったねえ。」ジヨバンニはもうすっかり機嫌が直つて面白そうにわらつて女の子に答えました。

「あれきつと双子のお星さまのお宮だよ。」男の子がいきなり窓の外をさして叫びました。右手の低い丘の上に小さな水晶でもこさえたような二つのお宮がならんで立っていました。

「双子のお星さまのお宮って何だい。」

「あたし前になんべんもお母さんから聴いたわ。ちゃんと小さな水晶のお宮で二つならん

でいるからきつとそうだわ。」

「はなしてごらん。双子のお星さまが何したつての。」

「ぼくも知つてらい。双子のお星さまが野原へ遊びにでてからすと喧嘩けんかしたんだろう。」

「そうじゃないわよ。あのね、天の川の岸にね、おっかさのお話なすつたわ、……」

「それから彗星ほうきぼしがギーギーフリーギーフリーて云つて来たねえ。」

「いやだわたあちゃんそうじゃないわよ。それはべつの方だわ。」

「するとあすこにいま笛ふえを吹ふいて居るんだらうか。」

「いま海へ行つてらあ。」

「いけないわよ。もう海からあがつていらつしやつたのよ。」

「そうそう。ぼく知つてらあ、ぼくおはなししよう。」

川の向う岸が俄にわかに赤くなりました。楊やなぎの木や何かもまっ黒にすかし出され見えない天の川の波もときどきちらちら針のように赤く光りました。まったく向う岸の野原に大きなまっ赤な火が燃されその黒いけむりは高く桔梗ききょういろのつめたそうな天をも焦こがしそうでした。ルビーよりも赤くすきとおりにチウムよりもうつくしく酔よつたようになってその火は

燃えているのです。

「あれは何の火だろう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだろう。」ジョバンニが云いました。

「蝸さそりの火だな。」カム、ハネルラが又また地図と首つ引きして答えました。

「あら、蝸の火のことならあたし知ってるわ。」

「蝸の火ってなんだい。」ジョバンニがききました。

「蝸がやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるってあたし何べんもお父さんから聴いたわ。」

「蝸って、虫だろう。」

「ええ、蝸は虫よ。だけどいい虫だわ。」

「蝸いい虫じゃないよ。僕博物館でアルクールにつけてあるの見た。尾にこんなかきがあつてそれで螫さされると死ぬって先生が云ったよ。」

「そうよ。だけどいい虫だわ、お父さん斯こう云ったのよ。むかしのバルドラの野原に一ぴきの蝸がいて小さな虫やなんか殺してたべて生きていたんですって。するとある日いたちに見み附つかつて食べられそうになったんですって。さそりは一生けん命に遁にげて遁にげたけどと

うとういたちに押おえられそうになったわ、そのときいきなり前に井戸があつてその中に落ちてしまったわ、もうどうしてもあがられないでさそりは溺おぼれはじめたのよ。そのときさそりは斯いう云いつてお祈いのりしたというの、

ああ、わたしはいままでいくつのものの命をとったかわからない、そしてその私がこんどいたちにとられようとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもとうとうこんなになつてしまった。ああなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまつていたちに呉くれてやらなかつたらう。そしたらいたちも一日生きのびたらうに。どうか神さま。私の心をこらん下ささい。こんなにむなしく命をすてずどうかこの次にはまことのみんなの幸さいわいのために私のからだをおつかい下さい。って云つたというの。そしたらいつか蝸かはじぶんのからだがまつ赤なうつくしい火になつて燃えてよるのやみを照らしているのを見たつて。いまでも燃えてるつてお父さんおつしや仰おほつたわ。ほんとうにあの火それだわ。」

「そうだ。見たまえ。そこらの三角標はちようどさそりの形にならんでいるよ。」

ジョバンニはまつたくその大きな火の向うに三つの三角標がちようどさそりの腕うでのようにこつちに五つの三角標がさそりの尾やかぎのようにならんでいるのを見ました。そしてほんとうにそのまつ赤なうつくしいさそりの火は音なくあかるくあかるく燃えたのです。

その火がだんだんうしろの方になるにつれてみんなは何とも云えずにぎやかなさまじまの樂の音や草花の匂のようなもの口笛や人々のざわざわ云う声やらを聞きました。それはもうじきちかくに町か何かがあつてそこにお祭でもあるというような気がするのでした。

「ケンタウル露をふらせ。」いきなりいままで睡っていたジョバンニのとなりの男の子が向うの窓を見ながら叫んでいました。

ああそこにはクリスマストリイのようにまつ青な唐檜かみみの木がたつてその中にはたくさんのたくさんの豆電燈がまるで千の螢でも集つたようについていました。

「ああ、そうだ、今夜ケンタウル祭だねえ。」

「ああ、ここはケンタウルの村だよ。」カムパネルラがすぐ云いました。「以下原稿一枚？なし」

「ボール投げなら僕決してはずさない。」

男の子が大威張りで云いました。

「もうじきサウザンクロスです。おりる支度をして下さい。」青年がみんなに云いました。「僕も少し汽車へ乗ってるんだよ。」男の子が云いました。カムパネルラのとなりの女の子

はそわそわ立って支度をはじめましたけれどもやっぱりジョバンニたちとわかれたくないようなようすでした。

「ここでおりにけあいけないのです。」青年はきちつと口を結んで男の子を見おろしながら云いました。

「厭いやだい。僕もう少し汽車へ乗ってから行くんだい。」

ジョバンニがこらえ兼ねて云いました。

「僕たちと一緒にいっしょ乗って行こう。僕たちどこまでだつて行ける切符きっぷ持つてるんだ。」

「だけどあたしたちもうここで降りなけあいけないのよ。ここ天上へ行くとこなんだから。」女の子がさびしそうに云いました。

「天上へなんか行かなくなつていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりもつといいとこをこさえなけあいけないって僕の先生が云つたよ。」

「だつておつ母さんも行ってらっしゃるしそれに神さまが仰おつっしゃるんだわ。」

「そんな神さまうその神さまだい。」

「あなたの神さまうその神さまよ。」

「そうじゃないよ。」

「あなたの神さまってどんな神さまですか。」青年は笑いながら云いました。

「ぼくほんとうはよく知りません、けれどもそんなんでなしにほんとうのたった一人の神さまです。」

「ほんとうの神さまはもちろんたった一人です。」

「ああ、そんなんでなしにたったひとりのほんとうの神さまです。」

「だからそうじゃありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんとうの神さまの前にわたくしたちとお会いになることを祈ります。」青年はつましく両手を組みました。女の子もちようどその通りにしました。みんなほんとうに別れが惜しそ^おうでその顔いろも少し青ざめて見えました。ジョバンニはあぶなく声をあげて泣き出そうとしました。

「さあもう支度はいいんですか。じきサウザンクロスですから。」

ああそのときでした。見えない天の川のずうつと川下に青や橙^{だいだい}やもうあらゆる光でちりばめられた十字架^{じゅうじか}がまるで一本の木という風に川の中から立ってかがやきその上には青じろい雲がまるい環^わになって後光のようにかかっているのです。汽車の中がまるでざわざわしました。みんなあの北の十字のときのようにまつすぐに立ってお祈りをはじめました。あつちにもこつちにも子供が瓜^{うり}に飛びついたときのようなよろこびの声や何とも云いよう

ない深いつつましいためいきの音ばかりきこえました。そしてだんだん十字架は窓の正面になりあの苹果りんごの肉のような青じろい環の雲もゆるやかにゆるやかに繞めぐっているのが見えました。

「ハルレヤハルレヤ。」明るくたのしくみんなの声はひびきみんなはそのその遠くからつめたいたそらの遠くからすきとおった何とも云えずさわやかなラッパの声をききました。そしてたくさんのシグナルや電燈あかりの灯のなかを汽車はだんだんゆるやかになりとうとう十字架のちようどま向いに行つてすつかりとまりました。

「さあ、下りるんですよ。」青年は男の子の手をひきだんだん向うの出口の方へ歩き出しました。

「じゃさよなら。」女の子がふりかえつて二人に云いました。

「さよなら。」ジョバンニはまるで泣き出したいのをこらえて怒おこつたようにぶつきり棒に云いました。女の子はいかにもつらそうに眼めを大きくしても一度こつちをふりかえつてそれからあとはもうだまって出て行つてしまいました。汽車の中はもう半分以上も空いてしまひ俄にわかにがらんとしてさびしくなり風がいつぱいに吹き込みました。

そして見ているとみんなはつつましく列を組んであの十字架の前の天の川のなぎさにひ

ざまずいていました。そしてその見えない天の川の水をわたってひとりの神々しい白いきものの人が手をのぼしてこつちへ来るのを二人は見ました。けれどもそのときはもう硝子ガラスの呼びよびこは鳴らされ汽車はうごき出しと思ううちに銀いろの霧きりが川下の方からすうつと流れて来てもうそつちは何も見えなくなりました。ただたくさんのくるみの木が葉をさんさんと光らしてその霧の中に立ち黄金きんの円光をもった電気栗鼠りすが可愛かあいい顔をその中からちらちらのぞいているだけでした。

そのときすうつと霧がはれかかりました。どこかへ行く街道らしく小さな電燈の一行に ついた通りがありました。それはしばらく線路に沿って進んでいました。そして二人がそのあかしの前を通って行くときはその小さな豆いろの火はちようど挨拶あいさつでもするようによぼかつと消え二人が過ぎて行くときまた点つくのです。

ふりかえって見るとさっきの十字架はすっかり小さくなってしまいほんとうにもうそのまま胸むねにも吊つされそうになり、さっきの女の子や青年たちがその前の白い渚なみにまだひざまずいているのかそれともどこか方角もわからないその天上へ行ったのかぼんやりして見分けられませんでした。

ジョバンニはああと深く息しました。

「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に行こう。僕はもうあのさそりのようにほんとうにみんなの幸さいわいのためならば僕のからだなんか百べん灼やいてもかまわない。」

「うん。僕だつてそうだ。」カムパネルラの眼にはきれいな涙なみだがうかんでいました。

「けれどもほんとうのさいわいは一体何だろう。」ジョバンニが云いました。

「僕わからない。」カムパネルラがぼんやり云いました。

「僕たちすっかりやろうねえ。」ジョバンニが胸むねいっぱい新しい力が湧わくようにふうと息をしながら云いました。

「あ、あすこ石炭袋いそくだよ。そらの孔あなだよ。」カムパネルラが少しそつちを避さけるようにしながら天の川のひととこを指さしました。ジョバンニはそつちを見てまるでぎくつとしてしまいました。天の川の一とこに大きなまっくらな孔あながどほんとあいているのです。その底がどれほど深いかその奥おくに何があるかいくら眼をこすつてのぞいてもなんにも見えずただ眼がしんしんと痛むのでした。ジョバンニが云いました。

「僕もうあんな大きな暗やみの中だつてこわくない。きっとみんなのほんとうのさいわいをさ

がしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行こう。」

「ああきつと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集つてるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あつあすこにいるのぼくのお母さんだよ。」カムパネルラは俄かに窓の遠くに見えるきれいな野原を指して叫びました。

ジョバンニもそつちを見ましたけれどもそこはぼんやり白くけむっているばかりどうしてもカムパネルラが云つたように思われませんでした。何とも云えずさびしい気がしてぼんやりそつちを見ていましたら向うの河岸に二本の電信ばしらが丁度両方から腕を組んだように赤い腕木をつらねて立っていました。

「カムパネルラ、僕たち一緒に行こうねえ。」ジョバンニが斯う云いながらふりかえって見ましたらそのいままでカムパネルラの座っていた席にもうカムパネルラの形は見えずただ黒いびろうどばかりひかっています。ジョバンニはまるで鉄砲丸のように立ちあがりました。そして誰にも聞えないように窓の外へからだを乗り出して力いっぱいはいげしく胸をうって叫びそれからもう咽喉いっばい泣きだしました。もうそこらが一ぺんにまっくらになつたように思いました。

ジョバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中につかれてねむっていたのでした。胸は何だかおかしく熱り頬にはつめたな涙がながれていました。

ジョバンニはばねのようにはね起きました。町はすっかりさつきを通りに下でたくさん灯を綴ってはいましたがその光はなんだかさつきよりは熱したという風でした。そしてたったいま夢であるいた天の川もやっぱりさつきの通りに白くぼんやりかかります。黒な南の地平線の上では殊にけむったようになってその右には蠍座の赤い星がうつくしくきらめき、そらぜんたいの位置はそんなに変わってもいないようでした。

ジョバンニは一さんに丘を走って下りました。まだ夕ごはんをたべないで待っているお母さんのことが胸いっぱい思いだされたのです。どんどん黒い松の林の中を通ってそれからほの白い牧場の柵をまわってさつきの入口から暗い牛舎の前へまた来ました。そこには誰かがいま帰ったらしくさつきなかつた一つの車が何かの樽を二つ乗つけて置いてありました。

「今晚は、」ジョバンニは叫びました。

「はい。」白い太いずぼんをはいた人がすぐ出て来て立ちました。

「何のご用ですか。」

「今日牛乳がぼくのところへ来なかったのですが」

「あ済みませんでした。」その人はすぐ奥へ行つて一本の牛乳瓶ぎゅうにゅうびんをもつて来てジョバンニに渡わたしながらまた云いました。

「ほんとうに、済みませんでした。今日はひるすぎうっかりしてこうしの棚をあけて置いたもんですから大将早速親牛のところへ行つて半分ばかり呑んでしましましてね……」その人はわらいました。

「そうですか。ではいただいて行きます。」

「ええ、どうも済みませんでした。」

「いいえ。」

ジョバンニはまだ熱い乳の瓶を両方のてのひらで包むようにもつて牧場の柵を出ました。そしてしばらく木のある町を通つて大通りへ出てまたしばらく行きますとみちは十文字になつてその右手の方、通りのはずれにさつきカムパネルラたちのあかりを流しに行った川へかかった大きな橋のやぐらが夜のそらにぼんやり立っていました。

ところがその十字になつた町かどや店の前に女たちが七八人ぐらいつ集つて橋の方を見ながら何かひそひそ談はなしているのです。それから橋の上にもいろいろなあかりがいっぱ

いなのでした。

ジョバンニはなぜかさあつと胸が冷たくなったように思いました。そしていきなり近くの人たちへ

「何かあつたんですか。」と叫ぶようにききました。

「こどもが水へ落ちたんですよ。」一人が云いますとその人たちは一斉にジョバンニの方を見ました。ジョバンニはまるで夢中で橋の方へ走りました。橋の上は人でいっぱい、河が見えませんでした。白い服を着た巡査も出ていました。

ジョバンニは橋の袂から飛ぶように下の広い河原へおりました。

その河原の水際に沿ってたくさんのあかりがせわしくのぼったり下ったりしていました。向う岸の暗いどてにも火が七つ八つうごいていました。そのまん中をもう烏瓜のあかりもない川が、わずかに音をたてて灰いろに流れていたのでした。

河原のいちばん下流の方へ州のように出て出たところに人の集りがくつきりまつ黒に立っていました。ジョバンニはどんどんそっちへ走りました。するとジョバンニはいきなりさつきカムパネラといっしょだったマルソに会いました。マルソがジョバンニに走り寄ってききました。

「ジョバンニ、カムパネルラが川へは行ったよ。」

「どうして、いつ。」

「ザネリがね、舟の上から烏うりのあかりを水の流れる方へ押しおしてやろうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこつたろう。するとカムパネルラがすぐ飛びこんだ。そしてザネリを舟の方へ押しおしてよこした。ザネリはカトウにつかまった。けれどもあとカムパネルラが見えないんだ。」

「みんな探してるんだらう。」

「ああすぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見附みからないんだ。ザネリはうちへ連れられてった。」

ジョバンニはみんなの居るそちの方へ行きました。そこに学生たち町の人たちに囲まれて青じろい尖とがったあごをしたカムパネルラのお父さんが黒い服を着てまっすぐに立つて右手に持った時計をじっと見つめていたのです。

みんなもじっと河を見ていました。誰も一言も物を云う人もありませんでした。ジョバンニはわくわくわくわく足がふるえました。魚をとるときのアセチレンランプがたくさんせわしく行ったり来たりして黒い川の水はちらちら小さな波をたてて流れているのが見え

るのでした。

下流の方は川はば一ぱい銀河が巨^{おほ}きく写^かつてまるで水のないそのままのそらのように見えました。

ジョバンニはそのカムパネルラはもうあの銀河のはずれにしかないというような気がしてしかたなかったのです。

けれどもみんなはまだ、どこかの波の間から、

「ぼくずいぶん泳^{およ}いだぞ。」と云いながらカムパネルラが出て来るか或^{ある}いはカムパネルラがどこかの人の知らない洲^{しづ}にでも着いて立^たつていて誰かの来るのを待^{まち}っているかというような気がして仕方ないらしいのです。けれども俄^{にわ}かにカムパネルラのお父さんがきつぱり云いました。

「もう駄^だ目^めです。落ちてから四十五分たちましたから。」

ジョバンニは思わずかけよつて博士の前に立^たつて、ぼくはカムパネルラの行^いつた方^{かた}を知^しつていますぼくはカムパネルラといっしょに歩いていたのでと云おうとしましたがもうのどがつまって何とも云えませんでした。すると博士はジョバンニが挨拶^{あいさつ}に来^きたとでも思^{おも}つたものですか、しばらくしげしげジョバンニを見ていましたか

「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも今晩はありがとうございます。」と叮ねいに云いました。ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか。」博士は堅く時計を握ったまままたききました。「いいえ。」ジョバンニはかすかに頭をふりました。

「どうしたのかなあ。ぼくには一昨日大へん元気な便りがあつたんだが。今日あたりもう着くころなんだが。船が遅れたんだな。ジョバンニさん。あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね。」

そう云いながら博士はまた川下の銀河のいっばいにうつた方へじつと眼を送りました。ジョバンニはもういろいろなこと胸がいっぱいでなんにも云えずに博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を持って行ってお父さんの帰ることを知らせようと思うともう一目散に河原を街の方へ走りました。

銀河鉄道の夜

二〇〇三年七月一〇日 初版第一刷発行

著者 宮沢賢治

発行者 谷村勇輔

発行所 **ブイツーソリューション**

名古屋市昭和区北山本町二、一五、二

〒四六六、〇〇一六

電話 〇五二、七三二、六四四〇

FAX 〇五二、七三二、六四四一

発売元

星雲社

東京都文京区大塚三、二一、一〇

〒一一二、〇〇一二

電話 〇三、三九四七、一〇二一

FAX 〇三、三九四七、一六一七

印刷所 **V2印刷**

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担で

お取替えいたします。ブイツーソリューション宛にお送りください。

定価はカバーに表示してあります。

